



珠
寶
真
寶
譜
釋



明治二十年刻成

排教真訣畧解

東京 大成教館藏



排教真訣畧解

大成教管長平山省齋述



第一章

和歌の權輿神代諾冊二尊の言ことばより起おこりて至いた誠まこと無な造つく作さを以もつて和歌の本體ほんたいとあるを切説きつせつ

陰陽いんやう斯開しきあひ二靈にれい為なる群品ぐんひん之の祖そと諾冊だくさく二尊にそん奉ほう天神てんしん修理しゆり固成こせい之の命めい降造くだり八尋やちん殿との于を淤能おの

排教真訣畧解

碁呂島肇夫婦之禮

陰陽より群品之祖まで、太の安萬侶
朝臣の古事記の上表の文よ、志て此の
上よ乾坤初分る參神造化の首を作と
あるふ對して陰陽の氣斯よ開けて其
陰陽二の神靈即ち諾冊二尊の力を合
心志協ひて神人萬物を化成したまひ
て天地萬物の大祖とあり賜ふを云爰

よ二尊天神の是多陀用幣流國を修理

固成の大命城受玉ひて天降まして

瓊茅の滴より自ら凝固たる於能碁呂

島よ八尋殿城造始て夫婦の禮を肇た

まふ時よ諾尊の曰くあふ喜志や美し

き少女城按志愛衰登古事記よ阿那夜

那迹夜志愛衰登古事記よ阿那夜

偉丈夫志愛衰登古事記よ阿那夜

諾尊ハ夫志愛衰登古事記よ阿那夜

非改真央界洋

二

春の語るを聞て大よ感冊尊應へてあ
 ざる所ありきもあべし
 喜しや美しき徳義高き男子をと二
 尊各其思ふまを言よ出し玉ふ
 六れぞ神州歌謡の權輿あ呈上古ハ質
 樸そのまよ其心よ感するまハ成歌
 出て言の長き短きも定めず其意の想
 ひ起。所よ始て情の盡る所よ止まる
 顧よ是の天真の音調作為の無き所が

歌の本つ體ありその後素盞鳴神の出
 雲の國よ降る玉ひて八頭蛇成斬平て
 奇稻田姫を聚り宮殿の成て共よ棲玉
 ふ時よ咏出玉ふ八雲たつ出雲八重垣
 妻籠ル八重垣造留其八重垣乎と始て
 五文字七字五字七字七字合して三十
 一字よして聲律備るよなりし是上
 文上古長短の定まらざるよ應る其よ

王仁名人の難波津尔咲也此花冬籠今
乎春邊止咲也此花又采女淺香山影佐
衣見由留山乃井乃淺久波君乎思念奈
久尔あどの名高き歌とも、皆此の素
尊の八雲の神詠の聲律も従ふ後世ま
で此範圍を出るらと無きハ皆天道の
發見する本體あればあり

夫花間啼鳥水面鳴蛙云云

紀貫之の古今の序を引て歌の皇國の
寶典あるを明は夫花の間も啼諸鳥
水の面も鳴く蛙の聲を聞けば天地の
間も生ある者何者も歌をよまざる者
あらむや各それを以て天真の妙靈を鳴
えて毫ぶども作為するとあし而して真
實よして妄作あく念も無く想も無く
即ち、の惟神の道あり一たび斯惟神

の真體を悟り得まば能天命の性と云
 之即天津神の人々も界與玉ふ神魂天
 神と同一もて千年の古の神聖も皆同
 一まゝ後の世も神人聖人世も出賜ふ
 も亦皆同一あり惟も神人聖人同一あ
 るのこあらずして凡夫人民と雖ども
 亦皆同一あり之を推廣て大もそれバ
 天地の造化の玄功を賛くべく之を小

仁義禮智信我カ種類皆其道も當り得
 之也上も用ふれば天下經綸政治を禪
 べく之を下も用れば身も心も安く九
 族も高祖より玄孫を和睦も顯世も壽命
 長く健康もして兒孫蕃榮し幽世もハ
 天國の所謂日の雅宮も登無上安樂の
 真福を得百の行萬の善事何事も足具

伊勢神宮御祭文

らざるをよし故に神武天皇以来列世
の天皇之を以身を修め家を齊へ國を
治め天下を平治し賜ふ實に我皇國の
至寶とすべき御訓の道也故に古より
禁中よ學問の外必歌を學ばせ賜ひし
あり

天道三誠之妙云云
此一段の天道至誠即和歌の本體彼の

儒佛よ説所に自然合一あるを述ふ
天道三誠の妙流行して人及鳥獸虫豸
有足を虫と云ふの聲音よ現はる者
無足を身と云ふの聲音よ現はる者
儒教よ所謂誠ハ天の道あり之を誠よ
まするハ人の道あり至誠ハ勉すして道
よ中り思をして道を得る又一切萬物
皆我が身よ備る我が身よ反り求て至
誠の域よ至らば其樂これより大なる

正ハあらじといひ佛教も亦萬物も
應して更さらに心を住ぢうする所無なし而しかしてや
り其心そのこころも何事なにことも生なずる者ものあり三界さんざい唯ただ
心造こころぞうと云いふは同じ是皆我國これみなわがくにの和歌わがうたの一いつ
切萬物きつばんぶつ見るみるるの随ま更さらに思慮しりょを用もちひむし
て真心まごころの妙靈たうれいを現あらはす者ものと毫毛ごうもうも異ことな
るることなし之これを觀みれば道みちも東西とうざいの隔へた無な
きと哉や會得あひとくするるも餘あまあり

第二章

此章ハ歌うたの道みち後世のちのよに至いたり盛さかり行おこなは
より遂ついに上古いふしへの真まことを喪うは連歌れんがあり
と雖いふも亦また輕佻けうてうに流ながれて真歌まごうた衰頽まゐを
救まふも足たらば是こゝに於おいて芭蕉翁ばせうおう慨然がいぜん
として正風俳諧ちやうふうはいかいの一派いつぱいを開ひらきし所ところ
以もてを述のふ

詠歌之道後世云云

和歌ハ人情の自然おのづからも出る者ものふして我われ
の國の言辭ことばふれば後世のちのよ一向ひたすらも盛さかる天てん
下くだり行おこなれ歌うたも名なある家々いへいへの名人めいじん輩たい出い
して各華麗おのくわらの文藻ぶんそうを競まひ浮靡うゑびの言句ことば
を争あひ逐つふ我われか家いへも秘傳ひでんありと甲こう云い
へバ乙おつも亦また我われ門もんも秘訣ひけつあり吾家わが吾わら
門もんも限かぎて軒げんく人ひとも示あささびと互たがひも誇たか合あ
ひて囂が々くとして已や時ときふし終つも和歌わがうたの

真理まことを喪うしなふ抑皇國おさむくわうこくの歌うたの多おほき二十一ひ
代集家々だいきゅういへいへの集あを合あ幾萬部いくまんぶも至いたる上あ古こ
の古事記書紀こじき萬葉まんやうも在ある者ものも比ひをれ
ハ幾陪いくばいの多おほきふ至いたて却かへて和歌わがうたの道みちハ
日々ひひ月々つきつきも湮滅えんめつせ里さと
連歌者れんがしや雖な肇は於諾冊おのくたふ二尊ふたつ之神詠のうた云云
連歌ハ伊弉諾伊弉册いそだに二柱ふたむしらの神詠のうたも肇は
と雖なその體裁ていざいを成あたるハ景行天皇けいかうてんの

皇子日本武尊の甲斐の國坂折今山梨郡の
 行宮あんなぐらに坐まして珥み斐い婆む梨り菟つ句く伐む鳴を須す
 擬ぎ氏て伊い久く夜よ迦か經へ奴ぬ留ると咏あひじ玉たまひしふ
 従づ者さ應ことる者ものなし燈とも城し上ある翁おきなありて加が
 加が奈な比ひ氏て夜よ爾み波は古こ々く奴ぬ加か日ひ爾み波は吐こ普ふ
 加か與よと應こたえまゐらせしこそ連れん歌がの始はじめあ
 後のち世のよふ至いたり連れん歌が俳ひ諧かいと云いふそのあり
 是これハ歌うたの會かいの餘よ興きんよものしたるふそ

其一二を言いハ宗そう鑑かんの姿すがた城しろ見みれハがき
 つまたまろ松まつ蔭かげや月つきハ三さん五ご夜や中ちゆう納お言いの類るい
 あり又また守まも武ぶの俳ひ諧かいの連れん歌が千せん句くよ飛と梅うめ
 やかろくしとも神かみの春はるの如ごとき皆みな輕かろ口くち
 戲き言げんふして後のち世のよの弊へい歌うたと同おなし後ご醒ざ醒ざ酬ご
 帝ていの建けん武ぶ年ねん中ちゆう二に條じょう良りやう基き卿きやう一いつ條じょう兼けん良りやう卿きやう
 冷れい泉せん為ため祐すけ卿きやう等ら深ふかく憂うれひ連れん歌が新しん式しきを著あ
 し良りやう基き卿きやう爾に斐ひ婆む梨り菟つ句くの歌うたよ本もとつぎと筑つく

波集なむらを作り古いにしへも復たがひさむとて天文年中てんもんねんちゆう山崎宗鑑やまざきむねかみと云い者ものあり書あきを著あし弥縫よぎぬたれとも其弊そのひ救まひ難がたし然しかして音調おんてう野鄙やび格例かくれい繁縛はんばくして其真實そのまことの本體ほんたいを喪うしなふて歌うたこ同おなしく衰滅まゐせり只我ただわがる桃青翁とうきやうおん千載せんざいの後のちふ生なれ少あまして北邨きたむら季吟きぎんの門もんふ入いて連歌れんかを學まび其蘊奥うんおうを究きて壯年さうねんふして皇國くわうこくの歌道かどうの衰頽まゐを歎なげき慨然がいぜんと

して俳諧はいかいの一派いつぱいを開ひらく千古せんこ卓絶たくせつの見けん識しと云いふべし

第三章

桃翁俳門とうおうはいもん城開じやうかいくの功こうを述のぶ

歌也者かや天道てんどう至誠しじやう至不し亦偉也やくゑい哉云云やい歌と云いふハ天道てんどうの至誠しじやうの人間にんげん禽獸きんじゆう虫ちゆう多ちの自然おのづからの聲音こゑよ發出はつしゅつる者ものふして所ところ謂い勉めんずして道みちよ中あり思おもハせして道みちを

得あ從あ容うと力ちをあして至あ誠まの道ちも中あ是ま即ち
天てんと人ひとと唯ただ一ひとつある妙めう境きやう惟ただ神かみの真まことの本ほん
體たいあり後のち世のよの語ご格かく音いん調ちやうを競きまひ紛ま々く様さま
々くよ言いふして家い々くよ秘ひ傳でんあり戸こがふ
口く訣くわありと云いふ如ごとき者ものよ非あら以ら桃とう青せい翁おう
此この流りゅう弊へい哉や既すで歎なげむる所ところありて天てん然ぜん眞しん正せい
の正ちやう風ふう俳はい門もんの秘ひ密みつの鍵かぎを開ひらて和わ歌かの
本ほん來らいの道ちを俗ぞく談だん俚り語ごの中ちゆうよ寓よせ只ひ管すう
小こ後ご世せいの表へ面めんの皮かわ相さまた虚きよ飾しやくの邊へん幅ふく
を修おさむる弊へいを去さりて天てん地ち自お然ぜんの真ま誠せいの
妙めう機きを發はつ明めいしてより天てん下か後ご世せいの人ひと々く
よ此この誠せいの道ちよ進まる入いの門もん庭ていを會あ得とくせ
しむ其その功こう勞らう亦また偉おほ大たいよあらすや

第四章

芭蕉翁えんせうの三さん十じゅう一いち言ごんの和わ歌かを登のぼ正せいせ
すして俳はい諧かい小せう從じゆう事じ志したる大たい功こう徳とくを

述ぶ

蓋釐正三十一言至盛徳至矣
 惟ふよ三十一文字の歌の道の頽敗た
 る弊を釐正して古よ復をも特よ月卿
 雲客此歴々僅の人よ止りて博く億兆
 の人民よ施して斯道の廣大あるとを
 知らしむる能くは是桃青翁の畢生此
 力を盡し其躬を頭陀の境界よ墮して

斯俳門の一派を世の中よ宣揚し玉ふ
 所以あり是よ於て耕作をる村叟肩き
 商する賤しきその樵夫牛飼童よ至る
 まて皆悉く俳門よ入りて其道の中よ
 遊ふ事を得るよ至る嗚呼翁の盛ある
 徳義至まりといふ盡し

第五章

此段ハ芭蕉翁大悟徹底殆聖域よ至

りし人たる事を證する為古池の一
章を細述す

翁一生言々句々 云云

翁一生の間の言々句々皆天真活潑の
妙小非ざるいふし其中ふも古池の一
章最人口ふ繪炙して誰知ざるものも
ふし故ふ大の章を擧て爰ふ示し其他
の句も皆玄妙靈通ふらざる無き事を

類を以推して知る處し

一日翁訪僧至蕉門俳道為一教也

一日翁禪僧を訪ふ僧問曰く吾が釋門
の應無所住而生其心何等の解説を為
すべきや翁聲ふ應して古池や蛙飛ぶ
む水の音と唱ふ僧拍手讚歎して首肯
以一醫生坐ふ在る曰く予其意を解せ
以詳細示し玉へ翁曰く然らば試小

俚歌を以て之を解むと云て世の中ハ
障子の引手峰の松燧袋小鶯の聲と唱
ひ玉ひしき其意ハ世の中とハを爲て
の衆人を云障子の引手といふ意ハ春
分清明温暖の氣室よ満障子を開て清
き風を邀ひ入爲しと思ふ時ハ芭蕉翁
ハ已亡ありて障子をる里主とある戸
を開けバ向ふよ見ゆる峯の上青松限

りあき景色あり時よ嶺の松主とあり
て障子あし満坐の清風嶺の松風心よ
のあひしま、煙草を喫せむ事を思ふ
時よ嶺の松ハ已よ消て煙を喫る事主
とある燧袋を以て煙草を聞せたるハ
妙巧といふ爲し其時鶯の聲うるをし
く囀るさま如何も快し即鶯聲主と
ありて燧袋も亦亡し其間髪の毛を容

るの透間もなく主とある者四たび變
りて芭蕉の執著の念更ふし人の壽
命百年一年三百六十餘日生涯六万六
千餘日年々歳々時々刻々變化のぎり
ふくして一息も已む時なく而も芭蕉
翁の心何處にも住著する處なく眼も
觸れ耳も感ずる者皆主とあり一切世
間喜怒哀樂愛惡慾種々の境場所因縁

千緒萬端憧々と絶へば往來して炯然
とあきららるる鏡の中は現出する來まば
照し去れば本来の空虚靈明一物も無
し故此の明鏡の中一物も無れとも物
來まば現れ物去まば即舊より依り本の
如く虚靈不昧あり是を天神界與此神
魂といふ儒ふ之を天命の性又ハ上帝
の衷を降といひ佛より真如實相といひ

いひ佛性と云ひ本来の面目といふ所
謂一切萬縁よ應じて住著をる處無く
して其心よ生れども其心よハ起滅
あし即本来空ふして無心の佛性あり
古池の章ふて言へハ古池ハ本来固有
の性ふれハ古池と稱へく明鏡ふ比し
蛙兒明鏡の中ふ顯きて飛込む水の音
無心の蛙兒が無心の水よ飛込音の清

くしき言をるるは時よ蛙兒のそふ
あらば凡べく雪月花鳥一切天地の間
み形あるそのよな如是洞然とあきら
るあらざるなくして而も少一の痕も
と、免ず古人の歌よ池の面よ夜ふく
月を通へども心もと免は影も能こそ
ず又照とも月も思をすうつたとも水
も思をぬ猿澤の池輾轉来るその皆照

亦復如是儒小之在道心といひ佛小
之を佛心と云即ち我の神魂天人唯一
の主人公即我一身の君主あり四支手
足百體腸胃諸臟即皆臣僕あり召仕あ
り仮初ふも臣僕各其職務を奉じそ君
主の命ふ従へば所謂道心常ふ一身の
主とありそ人心每常主の命を一々聽
そ従へハ大聖人大賢人あり若妄念が

主とありそ神魂(道心)之の臣僕とあり
妄念よ駈役せらるるときハ小人とあ
り凡夫とある諸教の旨皆神魂ハ主あ
り妄心ハ臣あり君ハ君の位臣ハ臣の
分限を正から志めむとある外あらは
芭蕉翁夙く此よ自得する所ありて大
悟徹底する旨切適此一句よ言出せる
あり是芭蕉翁の家門の俳道ハ一此教

とある所以あり

按獅子菴蓮二至為不朽龜鑑云云

按むるふ獅子菴蓮二翁著す所の白馬

經小正門一道建立之意と題して曰く

今日ハ昨のとく昨日ハ今日の如し千

萬年も如是是目前端的自然の本體は

り桃青の名字を打破して方始く正門

よ入る古池や蛙飛六む水の音此一句

ハ芭蕉翁が佛氏の所謂正法眼藏涅槃

妙心を悟得て之を十七字に發せり而

して此小序ハ世よ傳らる余曩よ翁の

親書を請く我る獅子菴の門小傳く萬

代不朽の龜鑑と云云とあり

東花坊支考至併備後賢之查考

東花坊支考著以所の葛乃松原書も

亦詳小六の事を論せり曰く翁古池や

の句を得玉ひく蛙云々の上五文字を
想當に晉子其角側ありに在ありく山吹ありやとあ
りてハ如何いと申ませし小翁おきな遂つひに古池ふるいけや
の五文字ごもじを得えたり其音調おんてう高邁かうまいふして
意旨いし悠遠ゆうえんあり蓋傳けしつふる所異ところ同どうあまど
も皆翁みなおきなの道みちを悟得さとし句くありとまする事こと
ハ同一どういつあり併舉あわせあげく後の賢者けんしやの查考さかうよ
備ふ

第六章

芭蕉翁せせうおう艱い關かん辛しん苦くしく十大弟子じゅうだいどのしを得え
て後世こうせい小其せうき道統どうとうを垂たるる大功たいこうを論ろん
ぶ

天真之歌者至千辛萬苦之血痕也

天然てんねんの真歌まことうたハ只ただ一の誠まこと而已のみ是これより外ほか

よある事ことあり延曆えんりやく桓武えんぶ帝てい延曆えんりやく十三年じゅうさんねん郡ぐん

遷うつり平安へいあん城じやうと云いふ是これより奈良ならの朝あさと云いふ

ふ年中より已降その理を知る者ありし
千載の下獨り芭蕉翁活眼を開く神代
の昔の真の歌道よ迦里中古の舊習を
脱落しく真歌の道を傳へ始て人々安
心立命の地位を知る是より天下の其
正門を得ざる者をして斯道よ入し免
んと志して自緑髪を薙棄る名聞利養
を離れ官を棄る富貴功名の念を斷頭

陀僧形廻國行脚を學び風簾烟笠の旅
姿山河の險阻城跋渉し湖海を航し百
方其道を傳ふべき人城討歩行き關難
を極く漸く高足弟子十人を得たり
十哲の第一寶井其角ハ竹下東順醫師
孔子幼名源助儒城寛齋よ學び醫城草
川某詩を大巔禪師書ハ佐々木玄龍畫
を英一蝶よ學びく其妙城究め後蕉門

不入く尤高足たり晉子其角ハ易ノ晉
 ノ卦ヨ取る寶晉齋ヲ米元章ノ硯ヨ題
 せし字なり一號螺舎晉子又雷柱子涉
 川畫名ハ薯子ト云狂雷堂狂而堂六病
 菴善哉菴文合菴等の號あり性放逸高
 邁人事小拘らば常酒垓嗜んで其醒た
 る垓見る事あし一日詩文の會筵ヨ行
 く人々苦吟の中ふ其角醉卧し仰ぎ居

忽ち一妙句を得たりと起あがりて曰
 く仰見銀河底と又冠里公の會よ公の
 曰く金柑有く銀柑ふきハ如何と戲
 玉へハ答く金玉有て銀玉無り如しと
 其敏才大抵如是後茅場町へ草菴垓結
 びし近隣ふ祖徠翁の家ありあはれを梅
 の香やとふ里ハ萩生莊右衛門寶永四
 年二月春暖坐門爐の吟とく鶯の曉寒

しきましくはと為して病も臥し少りよ
 七日ふして歿す此句一生の終吟とを
 成みたり又聲るまゝ猿の齒白し峯乃
 月人或ハ評して曰く若此子をして詩
 事せしめを何ぞ李王と沈宋とよ
 減せむや花盛り子て歩行る、夫婦
 如名月や疊のうへへ松の影冬来てハ
 驚鹿よとほる鴉りふ其縦横自在見る

べし抑俳諧の蕉翁と此子とよ於て
 や一朝論盡可ふ非ず後人或ハ云晋子
 能調師翁よ異ふりと其離く合者ある
 を知らざるあり支考許六の輩議論煩
 苛其作思を焦し奇を索むるも蕉翁の
 條暢晋子の放縦よ及もざる事遠し
 第二服部嵐雪ハ淡州小榎並村の人幼
 名久馬助長しく彦兵衛ト改東都よ出

新庄しんじやう隱州いんしゆう公こうよ仕つかへ故ゆへありと井上いのうえ相州さうしゆう
公こうよも奉仕ほうしせり一年いちねん君侯きんこうの供ともして我わが
第たいよ歸かへり井いの端はたよ倚よりて足あし濯そそんこを
る小卒せうそくよ空そらりき曇くもり霰あられ降ふり来きるを見みて
武ぶ士しの足あして米こめとぐ霰あられの如ごとくあど戲たむれ口くち
むさみしる素もとより菊きくを東籬とうしの下もとよ採と
る山色さんしきを樂たのまんこを志こころざし止とまるとく幾いく
なふし仕つかを辭ことし帶た劔衣けんい類たぐひ雜器ざうきよ至いたる

まで一塵いちじんも携たづへす其儘そのまま此こゝに置おき唯ただ一いつ
身みを行な雲うんと共ともよ立た出でくいつしる蕉門せうもん
よ遊あそぶ俳名はいなを治助ちすけと云い後嵐雪のちらんせつと改あらし
ハ嵐らんの庭にわの雪ゆきあらでハと思おもひ寄よとの
愚おろさ今更いまさら改あらんもたこるましと笑わらふ事こと
度たびくあり妻つまの名なを烈まといへるも嵐雪らんせつ
此こゝ切きあり初はめ黄落菴おうらくあん寒蓼堂かんりようどうの稱なづあり
後のちよ雪ゆき中菴ちゆうあん一いつよ不ふ白はく軒けん玄峯堂げんぼうどうと號なづす

六ハ禪錄雪埋_ニ千山_一什麼孤峯_ニ白_クある
といふ語_ゴふよれるとぞ常_ツよ濟雲_ニ方丈_ニへ
參_ス關西_ニ行脚_{ヨリ}歸_ク方丈_ニよ謁_ス師
問_ク云_ク去春_ニ臨別_ニ送_ク乞_ニ片語_ニ今秋_ニ歸來_ス
相見_レ了也_ト即_チ今_ニ如何_ニ是_レ行脚_ノ眼_トと答_テ云_ク
く觀音_ノ境_ノ裡_ニ古松_ノ樹_ノ師_ノ云_ク松_ニ無_ニ古今_ノ色_一
作_レ麼_レ生_レ無_ニ古今_ノ色_一的_ニ一句_ノ雪_ニ進_テ云_ク春_ニ
色_ニ無_ニ高下_一花_ノ枝_ノ自_ラ短_ク長_ク師_ノ領_ク休_テ去_トと雪

拜_シて退_キ去_ヒ一_トとせ重陽_ノの詠_ニ黄菊_一
白菊_ノそれ外_ノの名_ハあ_クも_グあ_ク晋_ノ子_ノ深_ク
く感_トて我_ノ生涯_ノ菊_ノの句_ニ是_レ及_ビばと
其_ノと_レ王_ノ人_ノく菊_ノの句_ニを_レあ_クふ_ク者_ハあ_レば師_ノ
の白菊_ノや此_ノ詠_ノと此_ノ句_ノと_レ外_ニ認_ザり
しと_レあ_リ其_ノ秀_ノ詠_ノ老_ノ成_ノ師_ノ翁_ノの集_中に置_ク
とも亦_モ何_ゾ分_ルや元_日や晴_テ雀_ノの物_ト
が_レと_レ不_レ言_ニ祝_賀還_ニ在_ニ其_中蒲_團着_テ寐

たる姿や東山譬喩の句難し此什温厚
和平實は平安の景あるるな世話しあ
き身の瘦よんり作り獨活竹の子や兒
の齒ぐたの美しき梅一王人一輪程の
暖りき澤瀉のふとり過たる暑うあ初
秋のお、後動きぬ繩すごま皆以て足
見正風之真晩年山伏井戸は宅をトく
久く住せり寶永四年十月歿を歳五十

四辭世一葉ちる咄一葉ちる風の土常
は用ひし一點印ハ門人周竹は授け周竹
是を吏登り傳ふ後世この下風お浴は
るもの東都お多し
第三支考々美濃の人始免禪門お入り
鎮藏主といひしハ弱冠の比あり吹毛
劔也春三月斷腸牡丹花下風といへる
偈を作て宗門の高僧は稱賛せらる東

都一寺の大會は碧巖の講師へ八條の
荆棘哉難問す故に衆僧其才を妒み遂
に禪機を挫ぎ里勢州山田に潛居以時
に涼菟それ才を惜み俳諧を勸て蕉門
に入りむ學成て歸郷に坊號を東華西
華と唱るは四方に逍遙をるの謂あり
野に在るときは盤子と呼び家に在ると
ハ獅子老人といふ支考といへるは舊

名あり其學二教に涉り常に著其所十
論古今抄等はと確論あり其發句不
りては許六と難兄弟あり片枝は脈や
かよひて梅の花灌佛や日出度事は寺
はゆり牛呵る聲は鳴たつ夕の影は
め僧形を替へば僧律を守りて居るに
しご既にして衣鉢を解の心起る時
蓮の葉は小便をれば御舍利は中比

肉食も放なしませしあのバ或法師諫て曰く
若も墮落せば來ら世に必ず牛をみあるべし
と答こたて牛みある合が點えんぢや朝あ寐ね夕ゆふとと
みい一い年せ尾びの巴を静せと伊い勢せへ遊あぶとて桑を
名なの渡わたし舟ふねみ乗る比ひしと春はるの半あ遠と山やま
々々いまど額ひた白しろく野の間まの内うち海うみハ莖靴せんとん草ぐさ
よ色いろどり雲ひ雀どりの聲こゑ遙とほよ聞きえて蒼そうくた
る海うみ上うへも鏡かがみの如ごとく繪ゑも及およぬ風かぜ景けいあり

静この此こ子の脊せ中ちゆう我わ叩たたいて一いつ句くありやと
問とふよ答こたて曰い古こ人にんも景けいよ逢あてハあ啞あむ
るといへり斯う十じゅう分ぶんある處ところよてを句く按お
の發はせむる物ものよあららび今こ夜よひ何なん方ほうありと
も宿やどりたる時ときそこに巨こ燧たいよ詠えいむべし
と實じつよ道みちを得えとる人ひとありと静しずも感かんト
て人ひとに語かたしとぞ晚ばん年ねん故こ園えんふ歸かへりて天てん
年ねんを終おる時ときよ當あて其その風かぜを慕あこふ者もの多おほく

後世連綿として美濃の一派を唱はる
 まと此老の徳といふべし
 第四森川許六は江州彦根の藩士一名
 百仲字羽官は菊阿佛と自稱す居を
 五老井と號し五老井四絶あり一は草
 字藤程巴記二は楊揮豆毛純賦三に雲
 花園あり村銘四は紫芝園賛許あり自其風雅
 の媒たる事李由ら文は知らる人とな

り敏達よりて文字は長ト兼て畫を善
 に畫を蕉翁も取て師とあし俳諧を教
 て弟子とあしと書り其發句意表の興
 味あり本箱は成べき桐の若芽の形今
 日限の春の行衛や帆のけ船看經の間
 を朝顔の盛り哉欄干は登るや菊の景
 法師初霜や治る江戸の人心嫁入乃門
 も過々り鉢ふた師翁没後そ此遺愛

の櫻樹を伐て肖像を刻み是を大津の
智月尼小贈る其文よ曰く

御床敷節せり於去御無事のとき目
出度存候拙者事いまたすたし無御
座候像も及延引候此度翁も手よぬ
れらま候五老井比古木よて刻みま
ひらせ候兼て大ふる像刻と度望御
ぎ候へとも病氣よて叶がとく條猶

又得御意申候不備

十月三日

霜の後像よ添ぬき菊もあ

許六

智月尼様

其恩遇の深を忘まざる事斯の如く惜
ひのあ晩年癩瘡よ罹りて人よ面を
事あし適道を問んと尋ね来る人あま
ども屏風を隔る語を通び一年金城の
萬子尋来て對面を請ふいゝて屏風を

隔へだやと病床びやうどよ入いて酒酌さくのよは唇くちびるが
け落おちて臭氣あき甚まし萬子まんこ近ちかく寄よりて昔むかしの如ごとく
語かたり合あひけり正徳しょうとく五年ごねん又また死しに終ある焉んの
偈げふ一時いつじ打破た破は屎し糞ふん壺か芬ふん臭氣あき供ま梵ぼん天てん
下くだ手てむかり死しぬる事ことぞと思おもひし上あり
手ても死しぬむ屎し上手かみうなり此こ子こ終ま身み才さいよ
誇こり他たを視みふ菊きく狗くの如ごとく故ゆに平へい生せい翁おきな
の腹はら中ちゆうへ下げ駄たをきて入いるものハ我われの

こなりと誇こまり斯か老らう後ごまで膚かわ撓たがまじ
目め逃のがりさるは俳家はいかの一ひと奇き物ぶつといふ處

第五だいご向井むかい去來きらい通稱つうしやう平次郎へいじらう肥前ひぜんの人ひと幼こ
より兄あにお從まりて京師きやうしに居をる夙ふふ蕉門せうもんに
入いり俳名はいなを去來きらいと稱あり其その風ふう格かく雪せつ中ちゆう庵あん
と並ならび其その先せんを争あらふべし當時たうじ關かん以い西さいの
渠きよ魁けいあり芳野よしの山やまはと散ちのよ花はな免まぐ

王動くとも見えで畑うつ男り友(玉)棚
 奥あつるーや親の顔(尾)頭の心元
 き海鼠うぬ(荒)磯や走り馴るる友(千)島
 師翁死して後抄を作て以其派(便)を
 天性の深切ある世の知る所あり其舎
 を落梯と名く自記風俗文選其舎不壁
 書して曰く
 我が家の俳諧に遊ぶべー世の理窟を

いふべのらび
 朝夕らとく精進を思ふべー魚鳥を忌
 小をあらび
 一速よ灰吹をまつべー烟草を嫌ふよは
 何らび
 一隣の居膳を待べー火の用心よハあら
 び
 いと風流よして可笑し支考り笈日記

よ云去來よ烟管を掃除する癖何れ又
此をのふに隣の居膳といふ事あり是
その屋敷守は與平といへる者朝夕の
食事を送りたる故ありと時よ寶永元年
九月死に彦根の許六その諫を作りて
曰く上畧若か王し時より洛よ居弓矢
を捨て十五年と吟トたるハ十五年先
のふと合て三十年來の大隠士略何の

頃とりり先師蕉翁よ見て風雅の名ふ
高ぶり京師よかまへて諸子の頭よ坐
に南西の氣を押へ東北の風を護は略
荒野の時正風體の眼を開き湖の水ま
はり々々五月雨とりや猿蓑は撰を蒙
く不易流行の巻を分ち後猿の新風ふ
臨んでも終よ幽玄の細みを忘は木
枯の地よも落さぬ時雨の那子規鳴や

雲雀の十文字とを申々里又何れの仲
秋よや(岩端や爰よも獨月の客と詠
て先師を驚りし月賞翫の第一古今の
秀逸よは極りたり都て一代の秀逸ハ
一兩句持る人さへ稀ふるに此子の既
よ數句ふ及べり二十餘年薪水の功つ
もり嵯峨の落梯舎よ師を迎へ石山の
幻住庵よ老を訪ふ心ざし深く一歳難

波の變を聞く速よ纜を解き義仲寺の
葬よも肩衣ふ鋤鍬を携ふ死後の城を
堅く守り諸生をなつけ初心を扶く越
の浪花ふ代りて有磯砥波の書を選
崎の卯七を助て渡鳥を集む此秋我大
願ふ力をよせて文選序者の一人よ進
み病床よ卧ても三度自佗の書を寄と
るよ何ある蕉門滅亡の月日よや何り

々ん去年の冬の中越の院家薨ト玉ひ
ぬ今年衣更着丈草卒に秋九月この郎
去て手もぎ足も死の思ひを任せて人
の腸を断せたるぞや 下略 又支考う落
梯先生の挽歌何里
第六僧丈草と其先代く尾州犬山の重
臣なり幼より學を好て倭漢を究む躬
みづから繼母に事て孝あり弟に其生

る所なれば家をゆづりて其意を慰む
嘗て左の指に疵つけ刀の柄握り難し
と偽り壯年武を辭して禪を學ぶ其時
の口號多年負屋一蝸牛化做蛄蟪得自
由火宅最惶涎沫盡偶尋法雨入林丘句
は涼風よきゆる残雲の宿る如常小法
華經を讀誦するより他事ありといふ
何の頃とるか蕉門に遊んで時と興を

催ふと我事と泥鱒は逃は根芹う那啄
木や枯木を探は花の中(聖靈も出て仮
の世の旅寐らあ有明は振向がたき寒
うな(着て立て夜の衾もなかりは(至隨
意自在歎唱は堪へば寶永元年二月四
十二歳ふして此世を去る友人去來誅
を作て曰く今茲如月末は四日月の州
庵は残る物あら禪師身はありぬと湖

南の正秀が許と里知はまなる不胸ふ
さより泪止免う祐ぬはくぐと此人の
むかへ我思ふは尾張の國ふ生ま犬山
侯は仕へて勇士は名も有はとあや一
日若黨一人を供して竊ふ君父の家を
忍び出道の傍ふ髪たはきり墨染は引
替られはふ中略洛の史邦はゆはり五
雨亭に仮寐は先師は見へ初らまはよ

り二疊の蚊帳の中に頭をねー並べ四
間の火燧の上は面をけし向て吟會れ
はくハ此人を缺以先師の言ふ此僧是
道は進み學む人の上は立ん事月を
越べからびとけたおへり其下地の艶
しき事羨むべし然ども性苦み學ぶ事
を好まび感ありて吟道人阿まて語は
常々此事打忘とるの如し先師深川へ

歸里玉ふ比古の邊の句とも書集めは
あられ々るうち大原や蝶の出てはふ朧
月なといへる句二三入侍りしは風雅
の奥に上達をる古と我評し此僧をつ
かしといへると我りへの傳へあり
又難波の病床側は侍ふ者どもに伽の
發句をば免今日と我死後其句あ
るべし一字の相談を加ふ處からびと

のたまひなれば或ハ吹飯より鶴を招
んと折あらの景物よりけて壽を述べ
或ハ吐き出た次の間お出ると便なき思
ひよあはれ又ハ病人の餘すすゝるや
むつおどき限り残盡しけるゝ其ぬ
ぐも等閑に見やり唯うづくまふ薬罐
の下の寒の形といへる一句のみぞ丈
草出来とりとは感ド玉ひける實よ斯

る折よか、ふ誠こそ動のめ興を探り
作を求るの暇あらどとハ其時よこそ
思ひ知られなれ先師遷化の後ハ膳所
松本誰彼尊みたまひて義仲寺のうへ
の山よ草庵を結びなれば時ハ門自啓
曲く水相逢をど打吟し或ハ杖を横へ
落梯舎を叩いて飛こんど儘り都の杜
鶺鴒とも驚りさまま予も彼山よをひ登り

て脚下^{きやく}琵琶湖^{このうみ}水指頭^{みづさき}華洛山^{くらくのやま}と眺望^{てうぼう}を共^{とも}
よし侍^{さむらい}りし城^{この}此人^{ひと}を山^のを下^{くだ}らざるは
誓^{ちかみ}あり予^よの世^よまたばよふの役^{やく}ありて
久^{ひさ}く逢坂^{あふさか}の關^{せき}をぬる道^{ちみち}も知^しらば去^きく
年^{ねん}の神無^{かみなし}月^{つき}一夜^{いちや}の閑^{かん}を偷^{ぬそ}み草庵^{くさあん}も宿^{やど}
りて寒^{さむ}き夜^よや思^{おも}つくまば山^ののうへと
申^{まを}て今宵^{こよひ}の芳話^{たうわ}もよ返^{かへ}づ我^{わが}忘^{わす}れりと
其^{その}悦^{よろこび}も斜^{あめ}ふらず更^ふ行^{やく}まゝに雷^{かみ}鳴^な地^ちも

ひゞき吹^か風^{かぜ}靡^なをはあちけまば虚室^{きよむろ}欲^{あらず}
夸^{こゝろ}閑^{かん}是^{こゝ}寶^{たから}満^{まん}山^の雷^{かみ}雨^{あめ}震^あ寒^{かん}更^{さら}と興^{きよう}出^いら
れ笑^{わら}ひ明^あして別^{わか}れぬ身^みの上^のを鳴^なから
はるなと聞^き之^の一^{いつ}雪^{ゆき}氣^けの空^{そら}も再^{また}び行^い免^{まぬ}
ぐり今^{いま}むあしき名^なけみ残^{のこ}りたる凡^{たゞ}十^{じゅう}
年^{ねん}の笑^{わら}は三年^{さんねん}の恨^{うらみ}も化^{くわ}し其^{その}恨^{うらみ}も百^{ひゃく}年^{ねん}
の悲^{かなしみ}を生^なむ惜^{おし}ても猶^{なほ}名^なごりをしく此^{この}
一^{いつ}句^くを手^て向^むて來^こ方^{かた}行^{ゆく}末^{すえ}を語^{かた}り侍^{さむらい}るは

こ(おき名た)く春や三年の生わ(れ)と
あり

第七野坡(や)ら越前(えちぜん)は商家(かみや)なりを(し)め江(え)
戸(と)は遊(あそ)び後浪(ごなみ)華(は)に住(ぢ)む樗木社(しゆま)と號(ごう)は
蕉門(せうもん)の徒(と)は附合(つひあひ)の體(てい)を備(そな)へるは此人
と越人(えつじん)ふ超(こ)へる者(もの)な(し)とふぞ發句(はくご)ま
と妙(めう)あり子規(しき)顔(がほ)の出(で)されぬ格子(こうし)の形(かたち)
長松(ちやうま)が親(おや)の名(な)て來(き)ふ御慶(ごぎやう)りな(は)き掃(は)り

除(ぞ)してから山茶散(てんささん)より(此)比(ひ)の垣(かき)の
ゆひ色(いろ)や初(はつ)志(し)ぐれ或(ある)夜(よ)盜賊(とうぞく)その家(うち)は
忍入(しのひいり)たり坡(か)相對(あひま)して云(い)く我(われ)一物(いちぶつ)の貯(たくわ)ひ
お(し)唯(ただ)茶(ち)一斤(いちきん)と、お(し)置(お)きり今夜(こんや)寒(さむ)々(々)
れば柴折焚(しばせり)て快(た)く寛話(かんわ)と(と)盗賊(とうぞく)
うあづきあ(ら)彼(か)此(こ)うち詠(あがめ)つ、机(き)上(うへ)
よ草庵(くさあん)の急火(きつき)を逃(のが)れ出(で)てと端書(たんご)して
我(われ)庵(いん)の櫻(さくら)も寂(さび)し煙(けむ)り先(ま)とあるを見(み)つ

け何の火事よやと問ふ坡爾このよ
答ふ左あらバ今日前の有様も句作あ
るべきや坡よあひち垣潜る雀あらを
く雪の跡と賊大よ感て出ゆきけり
其人とあり放ふる事此の如し老後先
師の無名庵を高津野よ移し自ら高津
野の翁と稱せり其年壽詳あらび
第八越智越人の尾州名古屋よ住み蕉

門の老弟あり見歸まば白うべいを
夕がらみ花あぶら植替らる牡丹の
於稗の穂の馬逃したる氣色のあ一年
江戸よて其角り句兄弟といふ書を著
して越人り送別の句よ散る時の心や
をさよ罌粟の花といへはに散る時ハ
風も頼まびけりの花と其角も及むぎ
るよし師翁も是を歎ぜらる曩も師の

行脚は供侍る約あり何れも何れも何れも何れも
心の志も覺とりや若き女あど出入
せし事も有り哉翁その終あらざる事
を憐で後の行脚は其亭に寄玉を以
何となく疎く成行し後悔して羨ま
し思ひ切る時猫の戀とはかおちけり
師も其慚愧をやとみしん後の撰集
又此句を加ふありとぞ翁歿して後

美濃の支考先師の夢想滑稽の傳あど
と妄言を構へ其他杜撰の書多く出
て古式を廢し世人を欺けるとして大よ
怒り不猫蛇といふ書を著して詳み其
非を辨せり實又我道は深切なる清潔
の士とは此叟の事なるべし
第九北枝ハ金城の磨工ふして牧童が
弟あり蕉翁その誅才を感じて北方の

逸士と稱し夕風は何吹あげて朧月來
る秋は風ぞありてもあかりに里竹賣
て酒は替むや露時雨そは作去嵐の室
よも入る初め其友如柳軒をあらべ
て酒を驚く枝素とり嗜む故は日毎お
行て阮藉ら爐邊は葡萄の風流を盡し
たり日と夜この事柳もそこへの倦る
る氣色なれば此比絶て言寄るべき方

便もなり中夏の比なりなるが枝訊て
その下女は糠味噌やあると尋ねはふ
下女も酒の事あらんと合點して是あ
しと答ふ枝いそく是あく一杯はむ
べしと柳腹をかゝつて大笑し終は酒
杯を許し申るとあま其時枝り口號夏
酒や我と乗出む火の車或夜枝り家よ
俳諧あり三更の比偷兒入たり知る人

有て斯と告ぐ枝打笑て煤掃よを出べ
 一と戯いふて居とり故み諸人よあ静
 よして其席を崩さば時よ世間吐しに
 茶のほちんくといふ前句出とり枝取
 あへず盗人の目よ掛らるゝめでたさ
 よと附とり元録年間金城舞馬の災あ
 りて房舎半の曠野とある枝が家も延
 焼よ逢ふ友人多く訪來る答へよ焼お

々里はまども花々散澄しとて自若た
 りされど此叟飛鳥河の常あきを悟得
 たる韻士ありと時人感トけるとぞ後
 再び火災よあへるよ從吾人先よ來り
 むのしは志氣いゝとて諸とも硯
 も筆もまみと成る烟の中よ一句作麼
 生枝おとへて諸とも小硯も筆もすみ
 となり其おとけ葉残るく物そなき斯

る變へんも滑稽ろくわいの忘わすざりき此時このときは家見いえみ
舞まいといふ集あひ出來でき其中そのうちふ焼やけふわりはま
ども櫻さくらさかぬうち支考しこう梅うめが香かうやまつ
一番いっばんは焼見やけみ舞まい牧童ぼくどううぐひはも笠かさ着きて
登のぼれ小屋こやの屋根やね北枝きたえだ又普請ふしんは懸くりて
哥仙かせん材さい槌づちの祝儀あはれぎふあらは水みづ鶏けいうふ北
枝えだ曇くもり々々れど卯うの花はなの時とき從吾じゆご坂越さかこ
る人ひとの笠かさきて杖つゑついて支考しこう 下略したりやく 或年あるとし

門人もんじん從吾じゆご病床びやうぶとは在あり日夜ひちやはどはりた
る友ともありとて枝えだをやみもふく訪とらひ行ゆ
き湯ゆ粥じゆくの世話せわまでも為なたり々々ふ免角とみかく
する中病うちやまひ篤あつくして治療術ちりやうじゆつ盡つきとりと聞き
て更さらはゆりび吾ごが命終いのちをえまじりと聞きあを
て、走たりゆき殯室ひんしつは入いて其棺そのこはんを叩たたき
從吾じゆごく我われを捨すてとばかり其跡そのあと々々大聲おほいごゑ
よて泣ないどいさり扱さこそ此程このほどうち絶とぎ

ころは別わかに堪たう祿ろくたる故ゆゑなりと初はつは
 譏そり輩ともも寄よ合あて感かんじたりとるやは
 まば平生へいせいの交まじり思おもひををられたり
 第十じゅう鯉こい屋や杉すぎ風ふうを江え戸ど北きた人ひとその身こ魚ぎよ家や
 によりて頗さか富とみりといへども生なま涯げ耳みみ聾ろうの
 憂うれありし兄あに仙せん風ふうと共とも蕉せう門もんは遊あそぶ雀あぐ
 歩ふと號ごうを挑ちやう灯てんの空そらは詮せんあり杜と宇ぎが
 くりと抜ぬけ初はつふ齒はや秋あきの風かぜ薜あまや其その日ひく

の花はなの出で來き此この暮くも又また操うへり同おなじ事こと
 師し翁おう深ふか川がわは庵いんをむむべり頃ころ此この老ろう殊ことは
 力を盡つくせり一ひと年とせ翁おきなに送そう別べつの句く何なにと
 ふく芝あし吹ふ風かぜも哀あはれ素そ堂どうは迷まよを評ひやうし
 て秋あきあるや冬ふゆあるや作さく者しやも志こころらび只ただ
 れもふ事ことの深ふかあらんといへり或ある書しよは
 師しの歿ごつ後ご去さの人ひと支し考こうと絶ぜつ交かうせるとし
 記きをハ大おほなる証あかし言ごあり牧まき童どうの巢そ刈かり笛ふえ

集よ杉風より支考へ文書あり其詞よ
いとく

愚事も早世あさよ上あがりふやゝほしく口ふい
づるも我わがと吟ぎんして我わがを慰なぐさむはかり
よ候諸事御免可給候一兩年の中よ
を追善おひぜんの句くを請申うけまうよて有あべく候以もつ
の外ほか病苦びやうくたもり候蚊あぶらのそねも達者たつしや
よ見みゆる夏あつの中うち

翌享保十八年八十餘歳よして死せり
是所謂蕉門の十哲といふは是あり是
よ於て俳諧はいかいのをしへ大よ世の中よ行
る事ことといなりぬ是皆芭蕉翁千辛萬苦
精神せいしん心血こころちゆうを瀝あせし痕あとの遺のこりしを王

第七章

此章ハ桃青翁を論斥ろんせきする者ハ非を
辨明べんめいして翁おきなの高徳かうとくを註誤しゆごせざらし

む

不知者言至歌道之宗師也

古今翁其心事も辨知せざる者の言や

ふ桃青翁家世々伊勢の國津の城主藤

堂家不仕へて文武不練熟通達一武門

よ恥ざる人物なり其職を奉り忠義を

盡し主家代々の恩は酬ふるを當然と

そ然るに自ら恣ふ主君を見棄先祖已

來の家を打捨く雜髪して諸國は巡廻

行脚し丐兒の境界を學び主君への不

忠祖先父母への不孝の罪おまじとり大

あるはなす況や諸國諸郡の莊司里正

其門は彷徨經廻りて或は十日或は半

月其門徒を聚て俳諧の筵席を開て外

見よは虚清風雅は似たまじとも天下庶

人不田畝は耕し耘る本業を廢し花鳥

風月の遊あそび又また酖おかしり多少おほく光陰ひかりかげを費ひ糜びせ
 しむるに於かへて其その門人かどびと信徒しんたうと翁おきなのつひ擧あげ
 又また倣あやひてなまのま真ま似に美み女めのの擧あげをせしし故ゆゑ事ことをを醜みに江え湖こ
 又また遊あそ歴りをを專まふしし本ほん業ぎやうをを捨すてて浪なみ遊あそむむる
 遊あそ民びと俳はい道どうのの行なををろしし又また隨まてて益えき多おほしし是こゝ
 皆みな桃もも青あお翁おきな之のがが桶かづをを作つくりりししなりなり
 皆みな形かたちをを古ふる事こととと以もふふ者ものありあり
 是こゝ芭ば蕉せう翁おきなのの真ま實じつをを知しるる人ひとのの論ろん又またあ
 りあり

ららびび設た蕉せう翁おきな又また後ご世せいのの迂う濶くわ放はう浪らうはは俳はい諧かい
 者もの流りゅうのの如ごとかかるる所ところ業ぎやうああららししめめむむ稍しやう道どう理り
 又また似にたたるる説せつとといいふふべべききれれどど如ごとかか蕉せう
 翁おきなのの事こと跡せきのの實じつ地ちをを知しりりてて世よのの中ちゆうはは功こう
 名な富ふ貴きをを脱だつ落らく抛たう棄きししてて捨す身しん決けつ定ていししてて
 千せん年ねん來らいのの歌か道どうはは衰せう頽たいたたるるをを興き起きままるる
 のの功こうをを知しららばば實じつはは我われがが皇かう國こく神しん代だいのの忠ちゆう
 臣しん中ちゆう興き歌か道どうのの宗そう師しあありりととせせむむ但だ徒た又また

本業を捨風流を主とし座食浪遊を事
として翁の本旨は達せず門人をして
善道又誘導く事を知らざるものハ翁
の罪人なるべし

第八章

此章は芭蕉翁の句の妙靈能く民庶
の頑冥不靈を感化しその高足弟子
及び其流を汲む名師宗匠往々天地

を動し人類を救ふの妙感あり後進
の士是を標準として勉勵勤學をべ
き事を述べて全局を結ぶ

蕉翁畢生以一句至其可不勉乎
芭蕉翁生涯の間は一句の俳諧を以て
頑亮の小人を感化せし事一々擧述は
夥しき事あり彼口開て五臓を見せる
あぢびの形又道傍の木槿ハ馬は噉ま

けうの如き皆人々の輕薄多言を戒む
それが爲に感トて言を慎み身を保
おど尤人口ふ膾炙して後の世に傳へ
る其意味の深長ある哉感に又(大哉春
大哉春と云云)の句に至りては天神化
育に靈徳を賛美し即萬物一體の仁を
咏出して餘る處なし躬に大道を悟得
るに非らざれば誰う之を能く言得む

其高足弟子即十哲人の寶井其角の三圍
神社にて夕立てや田を三圍に神ふら
ば又信州にて狐の瓜畑を荒しける哉
村民の歎きけまむ己の名の片身を噉
ふ狐哉と書きて其畑に立其夜より狐
の出ざりし類又加賀の千代子の桑名
七里の渡の船中乗合に卒然瘧病を發
する者あり一船狼狽各々持合薬おど

投とどるるは更さらふふ效あななしし或ある人ひと有あり名なのの千ち代よ
 子こふる我われ知してて一いつ句く之こをを救すくむむ事ことをを乞こふふ
 聲こゑは應おこしてて唐たう土どのの船ふねののねねああままのの落おち葉は
 のの瘧ぎよく忽たちちち愈つたりり又また東とう花か坊ぼう支し考かう北ほく國こく
 ふて同どう病びやうは罹かるるととののあありり一いつ時とき恰あもも夏か
 末ま秋あき初はつふふ係けりり乃なれればば秋あき近ちかききれれこことと
 あらハハ落おち葉はのの瘧ぎよく即すなはちち愈いたりり此こゝ類るい皆みな
 天てん神しん地ち祇ぎ感かん應おう較かく著ちやく一いつききととのの蓋かき歌うた道どうのの
いぢぢぢ

真ま髓ずいをを得えてて天てん地ち神しん明めいをを感かんぜぜ一いつむむるる所しよ
 以えふり嗟あ正せい風ふう俳はい門もんはは從じゆう事じととるるととのの其その
 勉べん勵れいせせざざるる可べ希せむむやや

俳教真訣畧解終

明治二十年三月二十日御届免許

全 四月十日 刻成

定價五拾錢

著述及藏版 大成教管長平山省齋

東京小石川原町四十四番

大成教教書發兌書林 北澤 伊八

浅草茅町二丁目
五番地

